

《2003年6月例会報告》

【日時・会場】2003年6月26日(土) 19:00~21:00 於筑波大学附属高校会議室 → カリンカ (~1:30)

【参加者(会員)】安藤裕一(東京大学医科学研究所) 梅本嗣(博報堂) 小幡真一郎(日本サッカー協会) 小森誠之(早稲田大学学生) 竹中茂雄(Next Community@キャプテン) 中塚義実(筑波大学附属高校) 本多克己(クラブハウス)

【参加者(未会員)】荒井義行(毎日新聞)

【カリンカからの参加】熊谷建志

注)参加者は、所属や肩書きを離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

【報告書作成者】小森誠之

サロン2002の月例会を活性化するには

サロン2002活性化委員会

5月例会・総会の議論を受けて「サロン2002活性化委員会」が発足し、徐々に活動を開始している。2002年FIFAワールドカップが終わって、サロン2002はどこに向かうのか。組織を見直し、活動を活性化させるにはどうしたらよいか。このような問題の切り口の一つとして、6月例会では「サロンの月例会」そのものを取り上げ、アンケートへの回答をもとにして参加者で議論した。

1. これまでのサロン2002の月例会とアンケートの主旨

1980年代後半から、日本サッカー協会科学研究委員会のサブグループとして社会学や心理学に興味のある人が集まって、お茶の水女子大の杉山進氏のところで勉強会をしていた(「社心グループ」と呼ぶ)。その勉強会に、Jリーグ発足以降、色々な人が集まってきたのが「サロン2002」のきっかけ。

「サロン2002」と名乗るようになってからの最初の月例会は、1997年4月。第6回あたりから筑波大学附属高校に会場を移し、97年~今日まで毎月、月例会を行い、今回で79回目を迎えた。会員制の組織になったのは2000年度から。月例会は、参加者からの参加費1000円で運営されている。参加者数は10~20人の間で推移していたが、2002年度頃から徐々に参加者が減少するようになってきた。月例会のテーマや、時間と場所の設定がもう少しうまくできないかということで、会員対象にアンケートを実施した。

質問項目は

- 1) 月例会のテーマとして取り上げて欲しいトピック
- 2) 情報提供お願いできる内容
- 3) 情報提供をお願いしたい方
- 4) 会場のアレンジ
- 5) 活性化のためのアイデア

現在サロンの会員は100人くらいいるが、回答を頂けたのが16名程度。アンケート結果の概要を作ることができるほどではなかったが、アンケートからいくつかのヒントが得られた。

2. サロン2002の月例会を活性化させるためには

- ワールドカップを機に、サロン以外にもサッカーを語る場ができてきた

90年代の半ばぐらいの月例会は、次から次へといろいろな人がやってきて、ネットワークが広がっていた時期。その頃は、サロン2002以外には、サッカーを本格的に語る場はほとんどなかった。

中塚：みなさん「忙しく」なってきた。

本多：忙しくなってきたのは、年齢層が上がってきたからとも言える。これまでの中心メンバーの人の年齢が上がってきた。これまで月例会は、発表したい人が発表するという形を取ってきたけど、アンケートを取ったことで、会員の要望に答えるという責任も生じる。

中塚：これまで「会員が話題を持ち寄る」形を取ってきたのは、それだけ多様な人材がここに来て、外部に求める必要がなかったことと、ここに来た人はサロンの仲間である（同志なので会員になってもらう）という意図があった。会員が携わる身近な話題を出してもらえればそれでいいのではと思う。

●年間を通じてのカレンダー作りの必要性

中塚：CHQや地域スポーツ、あるいは小幡さんから話があったレフリーカレッジのようなものも話題にしてもいい。ただ、ここで話したことはオープンになる。新しく立ち上げるものに関しては、オープンにできないところもあるので難しいのでは。

小幡：ここはサッカー文化を扱う素晴らしい場で、いろんな意見が聞けて自分の見方が広がる。若干テーマが難しいので、答えの出るようなもう少しわかりやすいテーマも必要ではないか。私としてはこれから作り上げるレフリーカレッジ、そしてレフリーに対しての考え方、「審判というのはどういうものか？」という話をお聞きしたい。

本多：シリーズでテーマを扱っていけば、参加者も参加しやすいし、まとめる時もまとめて送りやすい。

●サロン2002とサッカー協会との交流

中塚：9月にサッカー協会が文京区のお茶の水あたりに移ってくる。サッカー協会内で、たとえばCHQあたりはいろんな人の意見を聞く場を求めている。「サロンと協会の交流」には大きな可能性がある。

本多：ここで話したことがCHQに届いていけば、可能性が広がっていく

中塚：ここ（筑波大学附属高校）でやっていたのは、「ただだから」というのと「聖地カリンカ」があったからというのもあった（笑）。みんなが集まりやすいというのは大切。そういった意味では御茶の水はアクセスもいいし、地方から来る人にとっても東京駅が近いから便利。

●サロンの参加者とテーマ

安藤：サロンの会員が聞きたいことと、チラッと参加する人が求めている内容は違う。3回か4回に1回、大々的に広報活動を行って、イベント的に「旬な内容」を取り上げてアピールしていくことも必要では？

中塚：何回かに1回はそういったことも必要だと思うけど、サロンを会員制にした理由は「飛び入りによる月例会」ではいけないのでは、という意味合いがあった。飛び入り参加の人の中には、話し合いのマナーを欠き、そのため全体の時間が奪われることが以前あった。質の問題として、誰が来ているかわからない状態では話したいことも話せない。オープンイベントも必要だが通常の形ではない。活性化は単なる「人の増加」ではなく、会員または会員の紹介で来る人の増加と議論の深まりを目指したい。

中塚：東京都ユースリーグをやっていたころと言った時に、東京都サッカー協会の中で準備委員会を立ち上げ、現場の人間で何人か集まって濃い議論をする場はあるけど、それはサッカーやってる人ばかりだから、別の角度からの可能性といった話にはならない。だから、サロンに話を持ってきたときの、広告界の視点やフットサル大会をやっている方の立場から頂く意見はとても貴重。このように会員がこの場を上手く利用してくれればいい。

小幡：レフリーカレッジに関して言えば、他の人から見れば何をやってるのか？と思われている感じもしている

●レフリーとレフリーカレッジ

小幡：海外では中高生年代から審判を始める人が多く、審判を同じ仲間として育ってきている。高校の

仲間が審判をしていれば、選手と審判とのつながりが出来る。

荒井：今までは教師が審判をすることが多く「教育」という側面があった。判事になってしまっている。審判のスタートはキャプテン同士の決め事だった。レフリーの質という観点では、キリンカップで笛を吹いたドイツのレフリーも間違いを起こしていた。イギリスのレフリーもカードを出さないという自分の判断で審判をしていた。高田さんがメキシコ大会で3分ロスタイムをとった時に、他のレフリーやスペインの記者から批判されてしまった。レフリーの質が高い・低いはどういったものなのか？

小幡：カレッジが進めているのはまさしくそこで、今までは各指導者が「こいついいな」という人を審判として引っ張ってくる「待ちの姿勢」だった。カレッジとして審判の指導者と指導システムを地方に送るという役割もある。

梅本：ファシリテーションという観点からみて、「審判」と「選手・観衆」との間の信頼感・納得観という観点もカレッジに必要。ファシリテーターの話をしていると、「サッカー審判のように」という話が出てくる。「結果に興味はないけど、進行に興味がある」という立場が審判では？

小幡：審判の質として、やはりコミュニケーションが取れる審判が質の高い審判と言える。日本では、規則で決められたことだけを守ろうとして、コミュニケーションを取ることが苦手。

中塚：審判を目指していたある教師の話だが、当初は「裁く」という考えが見え隠れしていた。しかし何年後かに彼のジャッジを見たら、選手とよく話すようになっていて別人のようだった。何が彼を変えたのかということにとっても興味があるし、カレッジのカリキュラムにもそういったことを取り込んでいきたいですね。

小幡：やはり人が変わらなければ審判としても成長していけない。自分で経験しながら色々な視点を持てればよい。今の傾向として技術の追究に偏っていく人が結構多い。

荒井：今までレフリーがマスコミに会うこともなかった。

小幡：試合後すぐは難しいが、海外ではレフリーのコメントがマスコミに載ることがある。観客（ファン）も審判のコメントを求めている。これからはメディアカンファレンスが行われてきて、少しずつ近づいてくるようになってくる。

中塚：今までサロンの月例会では、審判を扱ったことがほとんどなかった。CHQのミッションの中にも審判のことがあるし、今後取り上げていきたい。

梅本：今の話のように、サロンで扱われた「審判制度」という組織や計画の中に、サポーター、素人、またはサッカー専門家の人からの意見が入ってきてフィードバックできるようになってくればよい。

●「レフリーカレッジ」や「ユースリーグ」など、アウトプットが見えればお互いにとってサロンが有効な場となる。サロンで話し合ったことが実際に何かのアクション繋がる。

中塚：出口がはっきりしていると意見しやすいし、発表する人もやりがいがある。

本多：Jリーグや協会（CHQ）の方も、様々な意見を求めている。

中塚：ワールドカップ後にサッカー協会が「新たな仕組み」を作り上げようとしている。今までは2002年に向かって目の前にあるものに追われていたが、これからは10年後、20年後を見据えて考え、実行していこうとしている。実行力のあるサッカー協会という組織に、何らかのアドバイスが出来る機関があってもいいのではと思うし、それがサロンであればよいのではないかな。

本多：フットサルプロジェクトのようにアウトプットが見えると参加意識も高まる。

中塚：アウトプットと言っても協会だけでなく、たとえばテレビ番組制作者に対して「これからのサッカーのテレビ放送」という形で議論し、意見を提供していける。①月例会をシリーズで、②アウトプットを明確にということがここで言えることか。とすると、サロンの歴史から言うと、月例会の位置付けが一步前へ置かれることになる。これまで月例会は「答えを出さない場」であった。しかし参加している人の中には、意見を交わすだけでなく「シュートを打ちたい（結論を出して行動したい）」人もいた。「サロンとしての考えを出していきたい」ということを求める人もいた。参加した人の中から色々な意見が出て、それを聞いた提案者が咀嚼して「どこかにシュートを打つ」ということもあるだろう。

本多：実行部隊として、問題意識のあるサッカー協会の人に「シュートを打」ってもらえることもできる。

中塚：サッカー協会の質が変わってきている。サロンとしてもバージョンアップが必要か。

梅本：参加費について、会員1,000円、ビジター2000円といったように「おためし」で来れる機会が欲しい。会員の紹介だけだと輪が狭くなってしまいうのも考えられる。テーマ別でワークショップのような形を取って開催ということも提案していきたい。ただ、それにはちゃんとした参加者を呼び入れるために参加者の立場などを明確にしていくことも必要で、しかも中心になって活動していく人がどうしても必要になってくる。

梅本：「サッカー協会」との連携には、サロンとしての独自性が保たれなくてはならない。仕切り方一つで解決していける問題。サッカー協会とはGive and Takeの関係を持ちたい。

中塚：セミナー企画とは違うけど、毎年やっているシンポジウムは、広く参加者を募集している。今年は8月2日の13時から東京体育館にて。ワールドカップ後1周年ということでワールドカップを題材にしてもよかったが、次のステップとして「育成」「地域」をテーマとしてやっていく。その意味で一つのアウトプットとして「Jリーグアカデミー」もある。これはできるだけ大々的に広告していきたい。

中塚：関西ではどうですか？

本多：サッカー協会が進めていきたいが、みなさん忙しくなってきたので「どこかと手を組んで」というのを考えている。「アスリートタウン」や「兵庫サッカー塾」と組んでみるということを考えている。

●団体間の交流

梅本：J S Aのシンポジウムなど、サロンのシンポジウムの宣伝も出来るし、他の団体とも連携していける。自分達で主催することも大切だけど、他のイベントの1コマとしてサロン2002として参加していく形もある。「箱のなかに入っていく」ことも考えていければ。サロンは卵だった。そこからシンポジウムや本が生まれていった。また他の団体の活動にも広がっていった。

3・まとめ

中塚：サロンの月例会の活性化に関して、レフリーカレッジに対してどういったアプローチができるのかという具体的な話も含めて検討した。その話からもわかるように、サッカー協会が実行部隊となろうとしている今日この頃、我々サロンもそれを応援しながら、サロンのスタンスを確立していくべきだと考える。ただ、両者の関係を明確にしながらいけない。

安藤：専門はハンドボールなのですが、レフリーの話が非常に興味深かった。ゲーム中に審判が選手と会話をするという点は、サッカー以外のスポーツではあまりやられていないという印象がある。是非カレッジを通じて、プレーヤーとの接し方を含めた「上手なゲームコントロールの方法」というレフリングの手引きを小冊子にして他の競技のレフリーも学べるようにしてほしい。

小幡：サッカーが起爆剤になって、他のスポーツに寄与していきたい。そういった意味でもサロンは貴重な場となる。

以上